

理事長からのご挨拶

「賀川豊彦と雲柱社と保育」

理事長 服部栄



<関東大震災の救援活動を原点として>

法人の保育事業は、今からおよそ99年前に起こった関東大震災時の救援活動が原点であります。法人の創立者賀川豊彦は、震災によって多大な被害を被った人々の重荷を共に負うべく、救援活動に取り組みました。その中で真っ先に取り組んだのが保育活動でした。それは、親が働くためには、子どもを預かる場所が必要であると考えたからでした。

その後、次代の変化により、保育は社会の責任として受け止められることとなり、制度や内容も向上してきました。現在の保育は、子どもを人格として捉え、その成長を社会全体で支援していく、すなわち子育ての社会化に繋がっていくものでありました。

また、この考え方は、地域福祉が主流となってきた現在、地域で子どもの成長を支えて行こうという施策（子育ての社会化）を促していきました。

<雲柱社の保育の考え方>

創立者が保育に取り組んだのは、ひとりの人間として、子どもの尊厳と成長が守られる環境を備えることにありました。それは、神より命を貸与された子どもが、その命を十分に生きるための場として、保育所が必要であるということです。雲柱社は保育所で受け入れる子どもたちが、それぞれの年齢の時を、良い人的、かつ物的な環境の中で保育を受けることが大切であると考えています。これは、創立者が子どもの人格を中心に据えて保育に関わった時から変わることのない考え方でありました。



<思想と実践の広がり>

当法人は、この創立者の思想と実践を基本にして、その後、障がい児・者の支援、子育て支援、放課後児童支援などの事業に取り組んできました。それらの事業展開の根底には、人格の尊厳と生活支援の一体化を目指す創立者の思想と実践の継承がありました。

<相愛互助社会を目指して>

人間の多様性の尊重が社会の主流となってきました。一方、この考えの拡大は自己責任と格差を生み出すことにもなりました。次代を担う子供たちに、私たちはどのようなバトンを手渡せばよいのでしょうか、、、それは競争社会に打ち勝つ力でしょうか、、。人よりも抜きんでた学歴でしょうか、、。安心できる財産の蓄積でしょうか、、。いずれも人生を生きていく上で欠かせないものであると考えます。

しかし、私たち雲柱社が保育を通して、子どもたちに伝えたいことは、隣人と共に助けあって生きる社会を創っていくことです。その力を身に付けて行ってほしいということです。

そのためには、保護者も私たちも、子どもたちをひとりの人格として受け入れ、人生を生きていくパートナーとして、歩みを共にしていきたいと考えます。新しい年も、法人が取り組む保育に理解と共感と支持をお願いいたします。

